

二五年後の子どもたちへ ひとこと集Ⅰ

日本児童文学者協会賞・受賞作家のみなさんより

(一九七〇年代～二〇〇〇年受賞)

あと二五年、つまり児童協創立百年、戦後百年を過ぎたころには、どんな子どもたちが生きているのでしょうか。まだ見ぬ未来の子どもたちへ、ひとこと寄せていただきました。

岩崎京子

「二五年後の子どもたちへ」という事ですが、今私自身さえきちんと把握できない我が身に、とても無理と尻ごみしていました。私九八才、夫も亡くなり、実家の妹たちも亡くなり、でも今、ここでお世話になり、若い方々にかこまれ、助けていただく日々です。その方々に「ありがとう」と、笑顔でいうのが、今、私自身の日々していることばの訓練です。

(ウイラフオーレ荻窪にて)



『花咲か』一九七三年 偕成社

加藤多一

もし、あなたの生活のまわりに「毎日の食へものにも困る人々」がいるのなら——それが日本以外の地球内の国であっても——その要因を作ったのは大人たちです。まちがわらないでね、それは子どもへの責任ではありません。そういう国を作ってきた大人たちの責任です。どうか、そのときは大人の責任をきびしく、烈しく批判してください。それをしないとまた同じことの繰り返しになりますよ。



『草原—ぼくと子っこ牛の大地—』一九八五年 あかね書房